



田 中 拓 未
サロンコンサートシリーズ in
わたなべ音楽堂
Vol.54
SALON KONZERT SERIE

PROGRAMM

2019年 2月24日(日) 14時半
わたなべ音楽堂

第 54 回サロンコンサートシリーズ

～ピアノリサイタル～

2019年2月24日(日) 14時半 わたなべ音楽堂

田中 拓未：ピアノ

プログラム

L.v. ベートーヴェン (1770~1827)

ピアノソナタ 第 8 番 作品 13 (1798)

- I. Grave-Allegro di molto e con brio
- II. Adagio cantabile
- III. Allegro

R. シューマン (1810~1856)

クライスレリアーナ 作品 16 (1838)

1. とても動きをもって
2. とても内向的に急がずに
3. とても激して
4. とてもゆっくり
5. とても活き活きと
6. とてもゆっくりと
7. とてもはやく
8. はやく、遊戯的に



ホフマンによるスケッチ「ヨハネスクライラー」

J.S. バッハ (1685~1756)

パルティータ 第 4 番 BWV. 828 (1725)

- Ouverture
- Allemande
- Courante
- Aria
- Sarabande
- Menuet
- Gigue

ご挨拶

本日はお忙しい中をご来場くださりありがとうございます。前半はベートーヴェンとシューマンによる音楽の「ロマン的」を探りたいと思います。後半では明るく穏やかなバッハの作品をお聴きいただければと思います。

プログラムノート

ベートーヴェンのピアノソナタ第8番は初期の代表作である。初版に「大ソナタ悲愴」とあり、ベートーヴェンもこの表題を了解していたようである。「悲愴 pathétique」の語源であるギリシア語 <Pathos> は体験、運命、不運、痛み、災難、喪失、そして喜怒哀楽の意味がある。

シューマンは文学にも精通していた。とくに E.T.A. ホフマン (1776~1822) の作品に心酔していた。楽長ヨハネス・クライスラーはホフマンの小説「雄猫ムルの生涯」に登場する主人公である。また、ヨハネス・クライスラーに関する自由な記述が2集にわたってまとめられたものが「クライスレリアーナ」(クライスラー的な)である。作者のホフマンは裁判官であり、作曲もする音楽家でもあった。ベートーヴェンと時代が重なる。ホフマンは小説の中で音楽の神秘を実にロマンティックなタッチで雄弁にクライスラーに語らせる。

『ベートーヴェンの器楽音楽が私たちに開いて見せる王国。白熱した光線がこの王国の深い夜を刺し貫くと私たちは巨大な影の存在に気づく。この影は大きくなり小さくなりながらじわじわと私たちに包囲を狭め、私たちを滅ぼし、そして無限への憧れという苦痛だけが後に残る。』

『ハ短調の和音。(絶え間ないフォルテシモ) 狂気の沙汰だ、気のふれた人の亡霊よ、なぜおまえは、こんなにも私をお前の魔界で揺すぶるのだ。私はお前から逃げ出すことができぬのか。』(『クライスレリアーナ』より 伊狩裕 訳 国書刊行会)

ホフマンはベートーヴェンの音楽にロマン主義を感じ取り、言葉にした。シューマンはその言葉による観念を音にできたのではないだろうか。

バッハは1725年に40代を迎え4巻の鍵盤曲集を出版することを企画した。その第1巻が6つのパルティータである。「パルティータ」はイタリア語で「組曲」の意味であるが、元々は変奏曲という意味でも使われていた。バッハのヤイプチヒでの前任者、クーナウに「パルティータ」という曲集がありそれに倣ったものといわれている。組曲の典型はアルマンド、コレンテ、サラバンド、ジグという4つの古い踊りの様式の楽曲によるもの。第4巻パルティータはこれに大規模なフランス風序曲で開始されエアー、メヌエットが挿入されている。表紙には「音楽愛好家の心の慰みのために。」とある。

次回予告

田中拓未サロンコンサートシリーズ 第55回<ピアノリサイタル>

～シューマン、ベートーヴェン、シューベルトの作品～

2019年 7月頃予定 わたなべ音楽堂